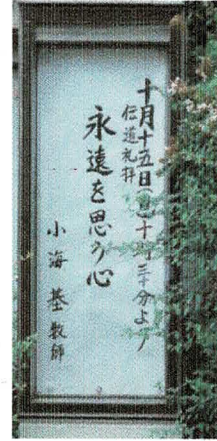


秋の伝道礼拝第2回(10月15日)

永遠を思う心

小海 基



コヘルトの言葉 第3章9〜11節

ローマの信徒への手紙 第1章33〜36節

聖書の語る「永遠」とは

この10月の伝道月間のテーマは「永遠」です。「永遠」と私たち「有限」な存在とは全く質の異なる概念です。私たちは目先の「有限」なものばかりに目を奪われがちです。そんな私たちに「永遠」が向こうから語りかけてくださるというのが聖書が語る「永遠」なのです。

ただ、気をつけなくてはいいけないのは、「永遠」というのは「無時間性」のように感じてしまいがちですが、永遠を無時間的に考え、宿命や運命のように考えてしまう

のは、人間の勝手な「合理化」だと思ふのです。

聖書の語る「永遠」とは冷たい石に刻んだ法則や運命のようなものでなく、もつと人格的な存在です。「永遠」の方が私たちの歴史に突入し、関わってくるのです。聖書以外の世界では、時間の延長線上に「永遠」が存在するかのようには錯覚しますが、聖書の世界では「永遠」と「有限」はきっぱりと違います。しかも「永遠」との出会い、修行の果ての「悟り」のような形でなく、「永遠」の方から私たちに出会い、迫ってくるのです。

1943年10月の学徒動員以来
今年で80年

皆さんは今年2023年の10月がどういう月と思われませんか。

この10月は実は1943(昭和18)年の学徒動員から80年に当たるのです。かつて学徒動員で召集されて戦地に赴いた方、見送った方の生き残りの方々も、少なくな

りつつあります。そうした関係者の集会は、かつては日比谷公会堂や学士会館などを会場に、集会が開かれていました。

先日、「学徒動員関係者の集会も今年が最後になるかもしれないが、良い会場を紹介していただけませんか」という相談を電話で受けました。大学引退後は山梨で過ごされている岡安先生からでした。

キリスト教関係なら、銀座の教文館や、神宮に近い信濃町教会あたりが良いのでは、とご返事しておきました。最終的にどうなったかは伺っておりません。

学徒動員で戦地に赴き生還された方は荻窪教会にも何人かおられました。すでに亡くなられていますが、そうしたなかでも印象深くて覚えているのは、橋本澄子さんのお連れ合いの橋本忠夫さんです。忠夫さんは、お姉さんから贈呈された小型のキング・ジエームス版聖書(いわゆる欽定版聖書)を戦地に携えて行き、持ち帰られました。その貴重な聖書を見せて

いただいたことがあります。橋本さんのように聖書を戦地に持って行った方は多かつたようで、そうした話はよく耳にします。

水木しげるさんにとって『ゲテとの対話』が心の支え

最近、漫画家の水木しげる著の『ゲゲゲのゲテ』(双葉新書)を読みました。学徒動員の一年前、二十歳の時に徴兵検査を受け、極度の近眼のため乙種合格。召集されたのはその翌年でした。戦地は激戦地のラバウルで、そこで左腕を失ったことはよく知られていますが、水木さんは戦地に岩波文庫の『ゲテとの対話』(上中下の三巻本、亀尾英四郎訳)を持って行きました。

ちょうど先週はイスラエルがガザに侵攻して、第5次中东戦争になりかねないというニュースが流れ、また無差別攻撃の画像が流れて私達、心を痛めています。

戦争に巻き込まれ、明日をも知

れないで命と向き合う時、人は一体、何を思うのか、何と対話しようとするか。何を思い巡らせるのかということをおぼろげに得ません。水木さんは戦争に行くのが嫌で嫌で、死ぬのが恐ろしくて本を読み漁ったのでした。

ニーチェ、カント、ショーペンハウエル、また倉田百三の『出家とその弟子』も聖書も、小説も山ほど手にしたそうです。そうした中で出会ったのが『ゲートルとの対話』だったというのです。

この本はゲートルの助手であったエッカーマンがゲートルの言葉をまとめたものです。この本を雑囊(ざつう)のうに忍ばせて、故郷の鳥取連隊に入隊し、そして激戦地のラバウル(Papua New Guinea)に行くことになりました。

水木さんはゲートルは文豪であっても偉ぶらないで、自分のことは自分でする。また世の中を偏狭でなく幅広く見ていて賢い人なんだと感嘆しています。たとえば、ゲートルの次のような言葉に、はっとさせられたと書いています。

死を考えても、私は泰然自若としていられる。なぜなら、我々の精神は、絶対に滅びることのない存在であり、永遠から永遠に向かつてたえず活動していくものだとかたく確信しているからだ

どんな状態にも、どの瞬間にも、無限の価値があるものだ。なぜなら、それは一つのまっただき永遠の姿、その代表なのだから

われわれは自分の上にあるものをすべて認めようとするのではないこと、自由になれるのではなく、自由の上にあるものに敬意を払うことでこそ、自由になるのだ

こうした言葉に水木さんは励まされるのです。水木さんは乙種合格でしたし、職業も漫画を描きつつ貸本屋を営んでおり、学徒動員で召集されたエリートたちからは軽く見られる立場でした。戦地では水木さんは現地の住民たちに友

達が多かったそうです。ラバウルの現地住民の食事では、時には昆虫も食べたそうですが、恵まれた幼少時代を過ごした都会っ子のエリートの人たちは、そうしたものを口にすることが出来ず、多くの兵隊が餓死したのでした。

一方、水木さんはそんなことに一切躊躇なく、現地の人と同じ食事を口にして命を繋ぎ、永遠なる存在に自分を委ねて生き延びたわけです。そうした中で水木さんが考えざるを得なかったのが「永遠」というテーマでした。自分が、エネルギーに満ちていても自分の存在は儂い。自分の存在は永遠の方から意味づけることが出来るのだと、ゲートルは言うのです。

コヘレトの言葉と重なっている ゲートルの考え

水木さんは、クリスチャンでなく、どちらかと言えば妖怪や幽霊など神道的なものをテーマに漫画を描かれた人ですが、本の中で自分の人生の80%はゲートルだと言っています。心打たれたというゲ

ートルの言葉は今日読んだコヘレトの言葉と重なります。

神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない。

そして、何て自分の人生はあつけないものかと思っているそのあなたに、永遠を思う心を与えてくださる。もちろん、われわれ有限な者に、神様の始めから終わりまでを見極めることは許されていない。永遠とは時間の長さのことでなく、私が生きている意味との出会いが永遠との出会いだと教えられます。

こうした「永遠」のことを伝えるのが教会の役割です。

人を集めるのが伝道ではありません。永遠のことを伝えることが出来る教会として役割を担ってまいるたいと願います。

(出席・29名。文責・編集委員会。要約担当・市川義和)